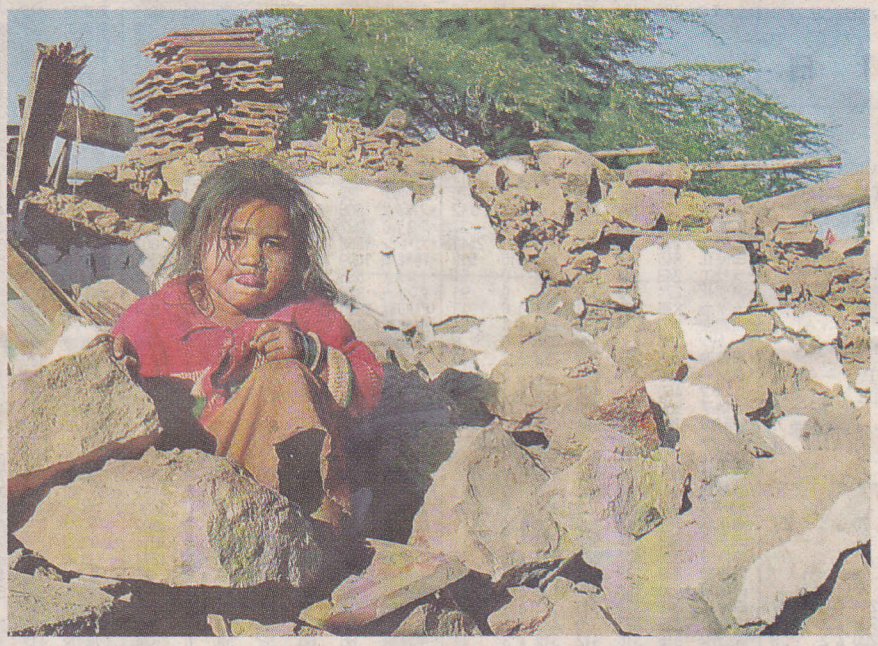
インド西部地震1週間

進まぬ復旧 人災の側面も

【アーメダバード（インド・グジャラート州）1日共同】二万五千人以上が死亡、約二十万人が住居を失ったとみられるインド西部大地震の発生から一日で一週間が経過した。最も深刻な打撃を受けたグジャラート州では、各地で建物倒壊などの被害が起き、軍や五十を超える外国からの支援チームが救援活動に当たっているものの、復旧作業は順調に進んでいるとはいえない。



1日、インド・グジャラート州ブジの東方にあるラパル村で、倒壊した自宅のがれきの上に座る5歳の少女（AP＝共同）

手抜き工事の建物が被害拡大

同州最大の都市アーメダバードでは、倒壊した約七十のビル、アパートの大半が築後十年以内の比較的新しい建築物で、手抜き工事などによる「人災」の側面も浮かび上がっている。

同州政府の発表によると、二月一日現在、一万四千人の遺体を確認。最終的な死者数は二万五千人と推定されている。

震源地となったカッチ地区では、クレーンなど必要な機材がなく、がれきに埋もれたままの被災者の救出や遺体搬出が住民の手作業で続けられている地域もある。水や食料の配給も遅れており、生き残った住民も極限状況での生活を強いられたままだ。

こうした地域の民家は、れんがや石をしっくいで固めただけのつくりで、もともと耐震性は考慮されていない。

グジャラート州都市部の新しいビルやアパートの崩壊に関しては、鉄筋の数量不足、質の悪い建材使用など建築基準が順守されていない実態が明らかになっている。

欠陥建築の存在は、首都ニューデリーをはじめインド全土で指摘されており、政府も対策に乗り出す方針だ。

救援物資を空輸

AMDA 岡山空港を出発

インドへ向かう航空機に次々と積み込まれる毛布や医薬品などの救援物資

インド西部大地震の被災者支援へ国際医療ボランティア団体AMDA（本部・岡山市楢津）が用意した航空機が一日、全国から贈られた救援物資や第二陣の救援チームを乗せ、岡山空港から被災地へ向け飛び立った。AMDAの航空機派遣は一九九六年の中国・雲南省の大地震以来。

航空機はロシアの貨物機で、同日午後十二時四十五分、岡山空港へ到着。ボランティアらが、がれきを取り除く土木機械や毛布、水、医薬品など計約三十トンの支援物資を積み込み、午後六時半すぎ離陸した。ロシア、トルクメニスタンを経由し、二日中にインドのアーメダバードに到着する予定。

岡山市の調整員小平雄一さん(三)や大阪市在住のインド人医師ハリシャンカラ・シャルマさん(六)ら支援チーム五人も同乗。出発前の会見でAMDAの菅波茂代表は「被災者にはこれから、健康管理や衛生管理が大切になる。支援してくれた多くの人の気持ちを被災者に届けたい」と話した。

AMDAは引き続き、寄付金や書き損じはがき、未使用切手などを集めている。問い合わせはAMDA本部（086－284－7730）。